

問題を唯物論的に見て、ラジカルに提起する

ところでまた、あの有名な「市場問題」の（一般におこなわれている）提起そのもののうちに、多くの不合理性がひそんでいることをも、指摘しないわけにはいかない。普通の定式化（第一節を見よ）は、まったくありそうもない仮定のうえに、直接うちたてられている。——あたかも社会の経済制度は、人々のある集団——「インテリゲンツィア」あるいは「政府」——の意志にしたがって作りだされたり、あるいは絶滅されたりすることができるかのようなのである（というのは、そうでなければ資本主義は発達し「うる」か？とか、ロシアは資本主義を経過し「なければならない」か？とか、共同体を保存す「べき」か？などというふうに質問することはできないだろうから）。……………

「市場問題」は、「可能である」とか「すべきである」とかいう無益な思弁の領域から、現実の基盤のうえに、すなわち、ロシアの経済制度はどのように構成されているか、そして、それはなぜそのように構成されていて、そうではなく構成されていないのか、ということの研究と説明との基盤のうえに、もっていくことが必要である。

第一巻「いわゆる市場問題について」P106~107 1893 年秋

コメント

必然性を見ない、「空想主義」と「おめでたさ」にたいして現実を唯物論的に見ること、その根本的な解決の道筋を提起する必要性を教えている。

「産業の空洞化」がすすむ現代日本でも大企業 OB の甘い言葉に欺されてはいけない。かれらは正真正銘の資本家であり、「労働者を墮落させるための別働隊」であることを忘れず、かれらを暴露することが大切である。